

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のＡ・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書き
なさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 新しい運河を掘削する。

(2) 不注意で器物を損なう。

(3) 頓挫した計画を立て直す。

(4) 国会の承認を得て批准する。

(5) 汗牛充棟な図書館を利用している。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 身をコにして取り組んできた。

(2) シヨシヨの頃に旬の果物を購入する。

(3) 印刷物にゴシヨクを見つける。

(4) 短時間でフクサイを作る。

(5) ムビヨウソクサイを祈る。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

中学三年生の鈴川有季は、年の離れた本好きの友人七曲直から、一冊の本を隣のクラスの森田麻友に渡すよう託された。有季と森田は、職場体験実習で市の図書館に行くことになっており、その打ち合わせで一度会ったことがある。有季は、どうやって森田に本を渡そうかと悩み、まずは自分が読んでみることにした。思いがけず夢中になって読んだその本は、山本周五郎の小説『さぶ』である。

ポケットの中にある文庫本の手触りを確かめて、どうしようかと思う。職場体験実習で会うときに、渡せば良いのかもしれない。しかし有季は、少しでも早くこれを森田に渡したかった。なにしろ、心の底から誰かに読んで欲しいのだ。

そこまで考えて、ぴんときた。学校が駄目なら学校の外で渡せば良い。学校の外でなら、森田は有季と会っている。しかも住み慣れた尾道であれば、なおいいだろう。

有季は放課後、電車に乗ると尾道まで帰った。しかし自宅には向かわず、尾道渡船の栈橋に向かう。森田は通学はこの栈橋を使うのだから、待っていれば彼女に会えるはずだった。

栈橋は海に浮かび、潮の満ち干によって上下する。スロープを下りるとコンクリート製の広場になっており、端にベンチが置かれていた。栈橋には誰もいなかった。

有季はベンチに座って、『さぶ』を開いて読む。
~~~~~  
何回かフェリーが到着して人が乗り降りしたが、有季はベンチに座ったまま待った。

四十分ほど待っただろうか。栈橋のたもとに見慣れた制服がちらりと

見えたので、顔をあげた。森田が棧橋を下りてくる。図書館に寄っていたのだろう。彼女は駅側からではなく、図書館側の道路から棧橋に入ってきた。

森田はぼんやりと海を見つめながら近づいてきたが、ふと視線を自分の周囲に戻して、びくっと立ち止まった。有季に気がついたのだ。

有季は、急にどきりとした。

（僕、なにやってんだろう。）

今更、思った。いくら早く本を渡したいとしても、女子を待ち伏せした自分の行動が常識外れに思えた。しかしここで逃げ出すと、余計に怪しい。

「森田さん……、ぐ、偶然だね。あの……座る？」

B  
彼女は暫く迷うようにじっとしていたが、小さく頷いて、ベンチの端にちょこんと腰掛けた。

「本当に偶然だね。僕、ちよつと、向島に用事があるんだ。」

白々しい言い訳をすると、森田はちらつとこちらを見てくれた。(1) 余りの居たたまれなさに、今すぐにでも逃げ出したくなる。しかしこのために来たのだから、今がチャンスとばかりに手にしていた『さぶ』を、ぱつと自分の胸の前に掲げて見せた。

「これ、今読んでたんだ。すごく。」

すごく、面白い。そう言おうとして、面白いという言葉はしっくりこないと思った。感動するということも、少し違う。良い話ということも、あまりきたりすぎて、この本の本質を伝えられないと思った。

「すごく、あの。」

森田は、澄んだ目で有季を見ていた。その目に促されるように、自分の胸の中にある言葉を、つい口にした。

「すごく、読んで欲しいんだ。誰かに。」

そう口にした瞬間、かっと恥ずかしくなった。読んで欲しいなんて、

考えてみたら押しつけがましいし、女子に向かって何かを要求することそのものが恥ずかしい。

（いっそ、海に飛びこみたい！なにやってんだ、僕は。女子を待ち伏せて、この本を読んでくれなんて。徹底的に変な人じゃないか。）

『さぶ』を抱えて、本気で棧橋からダイブしたかった。

（七曲さんのせいだ！もう、絶対、絶対、七曲さんには近づかない。）

八つ当たりぎみに心の中で叫び、精神的にのたうち回っていると、

「読んだことある、それ。」

森田が、有季の目を見ながらはつきり言った。有季は目を見開く。

「え……読んだ？」

こくつと、森田は頷く。

「読んだこと……あるんだ！」

嬉しさが、一瞬にして恥ずかしさを押しつけた。笑顔が溢れた。

「読んでるんだ！すごい、嬉しい！いいよね、この本！」

(2) 思わず前のめりになると、森田はちよつとびくりしたような顔をした。しかし嬉しくて、興奮してしまったのでかまわず言葉を続けた。

「僕、昨日この本を読んだんだけど。たぶん、一生好きな本になると思う。」

すると森田は、じいつと有季を見つめる。彼女はなかなか言葉が出ないと知っていたので笑顔で待っていると、ようやく彼女の細い声が出た。

「わたしもそれ、好きな本。」

信じられない幸運に、出会ったような気がした。

（読んでもうだけじゃなくて、森田さんも好きなんだ！）

そのとき海上から、フェリーのエンジン音と、ざざつと波をかき分ける音が近づいてきた。海の方へ目をやると、フェリーが接岸しようとして、大きくカーブを描いて船体を左右に揺らしながら棧橋に迫っていた。接岸すると、軽い振動で棧橋が揺れた。それを合図にしたように、森田が

立ちあがったので有季も立った。

向島に用事があると嘘をついた手前、渡らなければならない。しかしそのことが嬉しかった。フェリーの乗船時間は五分ほどだが、この間に本の話ができる。森田と一緒にフェリーに乗り込み、横長の座席に並んで腰かけるのを待ちかねて、有季は口を開く。

「この本すごく不思議だね。侍が出てきて戦ったりするわけじゃないけど、始終ドキドキしてハラハラしたんだ。普通の職人の話なのに。止まらなかったんだ、読むのが。印象に残る場面が幾つもあるし。森田さんは、どこの場面が好き？」

少し考えて森田は口を開いた。

「最初。」

そして三、四呼吸だけ間を置いて、再び口を開く。

「泣きながら、さぶが橋を渡って、それを栄二が追いかけて引き留めたってとこ。」

「<sup>(3)</sup>そうなの？」

有季にとってみたら、何気ない物語の始まりだった。ぱらぱらとめくって、最初の一文に目を落とす。

「どうして、ここなの？」

問うと、間があって森田は答えた。

「話の中でさぶが、何回も言うから。あれが話の中で、ずっと生きてる。何回も目の前に浮かぶ。」

「どういうこと？」

森田は、細い声で答える。

「暗くて雨が降ってて、ずっとつらいことがある中で。二人とも、頑張って生きていくんだなって。」

有季は手にある文庫本の表紙を見おろした。

（そうか。それがこの物語を貫いてるものなんだ。だから表紙も、あの

場面なんだ。」

<sup>(4)</sup> そう思うと、一層物語は一つのまとまりと信念を持って、有季の前に現れる。そして同時に、森田が「ずっとつらいことがある。」と口にした言葉が、胸の奥に響く。

<sup>(5)</sup> 言葉というのは、不思議だ。その人の思いが一番こもっている言葉だけが、いやにはつきりと聞き取れるのだ。きっとコンピュータのソフトウェアにはその違いを表現できないし、聞き取れない。けれど生身の人間の言葉で発せられ、そして生身の人間の耳で聞くことによって受け取れる。

（森田さんは、生きていくことを、あの両国橋の橋の上の風景みたい  
に思ってるのかな。）

それはある意味、真実なのかもしれない。けれどそこに、ひとりぼっちだと光はない。栄二とさぶは二人だから、二人には微かに光があるのだ。

あの両国橋の上で、たった一人は切ない。

物語をこんなふうに読み解ける心がある人が、一人であの薄暗い雨の橋の上に立っているのはどれほど侘しくて哀しいだろう。

（三川みり「君と読む場所」による）

〔注〕『さぶ』——さぶと栄二という同い年の二人を主人公にした江戸

時代が舞台の小説。

向島——尾道水道を挟んだ向かい側にある島。森田の家がある。

橋——両国橋。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 余りの居たたまれなさに、今すぐにでも逃げ出したくなる。とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 森田を待つともなく待っている状況に耐えることができず、本のことなどなかったことにしてしまいたいと思ったから。

イ 森田を待つていたにも関わらず偶然をよそおい、とってつけたような言い訳をする自分にきまりの悪さを感じたから。

ウ 森田を待つ自分の常識外れな行動を、最初から森田に見透かされていたのだと気づき、ごまかしたいと思ったから。

エ 森田をここで待つと自分で決めた以上、本を渡す機会を逃がしてはならないと、高まる緊張を抑えきれなかったから。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 思わず前のめりになると、森田はちよつとびっくりしたような顔をした。とあるが、この表現から読み取れる有季と森田の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 『さぶ』を誰かに読んで欲しいと思っていた有季は、期待した通りこの本に興味を示した森田に感激して気持ちが高ぶっているが、森田はその有季のおしつけがまじさに迷惑している。

イ 『さぶ』を誰かに読んで欲しいと思っていた有季は、森田の方がこの本に詳しいと分かった嬉しさで一方的に話し続けているが、森田はその有季のひとりよがりの態度にあきれている。

ウ 心の底から誰かに読んで欲しいと思っていた本を森田がすでに読んでいたことが分かって、喜びのあまり心がはやる有季に対し、森田はその有季のあまりの喜びように戸惑っている。

エ 心の底から誰かに読んで欲しいと思っていた本を森田も実は好きだということが分かって、ほっとして口数が増えた有季に対し、森田はその有季のなれなれしい態度に困惑している。

〔問3〕「<sup>(3)</sup>そうなの？」とあるが、この表現から読み取れる有季の様子と

して最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 森田の答えは、有季がつまらないと思っていた場面であったために、悲しんでいる様子。

イ 森田の返答は、有季が気に留めなかった場面であったために、拍子抜けしている様子。

ウ 森田の答えは、有季が単調で不要だと感じた場面であったために、合点がいかないう様子。

エ 森田の返答は、有季が読み飛ばしていた場面であったために、内容を思い出せない様子。

〔問4〕「<sup>(4)</sup>そう思うと、一層物語は一つのまとまりと信念を持って、有季

の前に現れる。」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 困難があっても生き抜こうとする人間の懸命さが、この物語の根底に流れ続けているものだとはっきりと了解され、なぜ表紙に冒頭の場面が描かれているのかも分かったということ。

イ ままならない世の中を友と一緒に乗り越えようとする冒頭の場面が人生の教訓を描いているのだと気づき、今後友人を大切にしようという強い決意がわき上がってきたということ。

ウ 冒頭の場面には本当の自分を理解してくれる相手がない人間の孤独が暗示されていたのだと分かり、表紙にはその悲しみとつらさも表されていたのだと得心がいったということ。

エ 何度も繰り返し返される冒頭の場面に作者の言いたかったことが表されていたのだと思い至り、これまでの自分の物語の読み取りに間違いがなかったことを確信しているということ。

〔問5〕言葉<sup>(5)</sup>というのは、不思議だ。とあるが、この時の有季の気持ちとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 感情のある人間のやりとりだからこそ、言葉の力を信じて伝えあうことができるのであり、精密なコンピュータを用いない限り森田の真意に気づけないと感じている。

イ 生身の人間の会話だからこそ、有季は言葉で明確に表現されていない森田の思いをくみ取ることができ、これから森田とどう関わっていくべきか思案している。

ウ 血の通った人間同士だからこそ、相手に本心を打ち明けることができるのであり、心を持たないコンピュータでは森田の問題を解決するのは難しいと考えている。

エ 機械や物とは違う生きた人間同士の会話だからこそ、有季は森田の言葉の中にある強い思いを感じ取ることができ、森田の心のうちに触れたように思っている。

〔問6〕波線部A～Dについて、その表現や内容を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 何回かフェリーが到着して人が乗り降りしたが、有季はベンチに座ったまま待った。は、船から降りてくる森田を見つけようとしたものの、

本の続きが気になって落ち着かない有季の様子を表している。  
B 彼女は暫く迷うようにじっとしていたが、小さく頷いて、ベンチの端にちよこんと腰掛けた。は、有季に親しみを感じ始めている森田の、

自分を大きく見せようとする態度を擬態語を用いて表している。  
C その目に促されるように、は、自分の言葉の続きを森田が誠実に待つてくれているような気がしている有季の様子を表している。

エ さざつと波をかき分ける音は、有季と森田の心の距離が縮まることはないということを暗示している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

人間は身体として他者とともにあり、身体として世界を生きる。人間にとって身体は、それを通じて他の身体や事物からなる世界に出会い、それらを受け止め、それらに対して働きかける最も基本的な経験と表出、関係の場である。

<sup>(1)</sup> 身体が「場」であるとは、何やら奇妙な物言いに思われるかもしれない。この言い方には、身体とは、私たちが世界や他者と出会い、関係することの窓口であり、世界についての経験がそこでまさに「私の経験」として生じ、それを通じて他者に自らの思いや思考を示してゆくところである、という意味が込められている。

私たちは身体なしには、世界や他者と出会うことはない。私たちは身体を生き、その身体を通じて世界と出会い、他者たちとかかわりあう。私たちは身体によって他者の前に現われ、その姿勢や表情、所作や態度やたえずまいは、直接身体相互が触れあうことがなくても、他の人びととのつながりの中で、私に関する事柄を他者の前に示してしまふ。たとえば満員電車やエレベータの中で見知らぬ人びとと乗りあわせたとき、私たちは互いに素知らぬ顔をして、視線を宙に泳がせ、広告やパネルに目をやったりする。社会学者が「儀礼的無関心」と呼ぶこうした振る舞いは、「私たちは互いに関係のない他者同士ですよ」というメッセージとつながりの形を、互いに示しあう身体的所作である。妙な言い方だが、<sup>(2)</sup> つながりが無いことを互いに示すという、言ってみれば最低限のつながりの中で、身体はその沈黙によってある意味を示し、他者との間の最低限のつながりを定義し、そのつながりを生きているのだ。

身体的な所作による相互の関係の意味の定義やコミュニケーションは、言うまでもなく、人間のような言葉をもたない動物にも存在する。

だが、動物の場合は相当部分まで本能に規定されているこの身体的コミュニケーションが、人間の場合にはかなりの程度まで文化的、社会的な規則に、しかも必ずしも意識されることなく共有された、<sup>(3)</sup> 暗黙の規則によっている。社会が違えば身振りや所作も異なり、それらが示す意味も異なるのだ。

身体というこの関係や表出の場の相互の関係（＝他の身体との関係）や、身体と外的環境世界との関係（＝他の身体以外の事物との関係）を仲立ちするものとして、さまざまなメディア、つまり関係の媒体がある。そうしたメディアの代表的かつ重要なものの一つがこれまでも見てきた「話し言葉」としての言語である。言語は、身体に発する音声<sup>おこし</sup>が分節され、発話者の意図や意味を相互主観的に表わすことを可能にすることによって、人びとのつながりを結び、そのつながりの中で意味を表示し、伝達するメディアになる。

身体に発する音声を素材にするという点で、いまだ身体から完全には分離していない「話し言葉」によるコミュニケーションを媒介したり、言語ばかりでなく非言語的な音響や画像情報の伝達や蓄積を可能にした<sup>(4)</sup> りするのが、さまざまな情報メディアである。身体から未分化で、発声されたとたんに消えてゆく音声としてのみ存在していた言語を身体から切り離し、空間的、時間的隔たりがあっても言葉を想起したり、再現したりできるようにするメディアとして文字がある。そして、文字が刻まれ、書き込まれるメディアとして石碑や粘土板、木簡や紙があり、巻物や書物がある。今日ではさらに、メモリ・カードやUSBメモリなどの電子媒体もある。これらのメディアは、声としての言語が届かないほどの遠くの場所へと言語が届くことを可能にし、地理的に遠い場所にいる他者たちや、時間的な未来にいる他者たちへと、言葉による行為や関係のつながりを媒介し、拡張する。

こうしてメディアが行為や関係を媒介し、拡張する「遠く」は、空間

的に遠い場所であることもあれば、時間的に遠い「過去」や「未来」であることもある。文書や書物、新聞や雑誌は、地理的に遠く離れたたくさんの人びとの間に、同じ言葉を読み、知り、使用することを共有するつながりや、同じ規則や法令に従ったり、同じ話題やニュースを共有したりする関係の広がりを作り出す。古代の石碑や古文書、過去の書き手たちが書いた書物などは、時の隔たりを超えた過去―現在―未来の間の書き手と読み手の関係を作り出す。

メディアが行為や関係を媒介する相手が、未来の自分であることもある。メモをとったりノートを書いたりするとき、私たちは、それによって今の自分と未来の自分をつなぎ、自分自身との間に時の流れを超えた関係を結んでいるのだ。

さらに、レコードやラジオ、無線や電話のような音声や音響を記録・伝達・再現する媒体、絵画や写真、映画やテレビのように画像を記録・伝達・再現する媒体は、言語的な音声や身体的な所作の像をそのまま遠方や未来に伝達することを可能にし、遠方や過去の人が見聞きしたことを現在いる場所において見聞きすることを可能にする。日々電話やインターネットを使い、テレビやラジオを見聞きし、雑誌のグラビアやアルバムの写真や街頭のポスターを眺め、映画やビデオ、CDを楽しむ私たちは、<sup>(4)</sup> そのようにして今・ここにいない他者たちとの間のつながりを生きているのである。

このような媒介作用によって、メディアは人と人をつなぐだけではない。他者が書きとったり、録音したり、撮影したりした文章や音響や画像を見聞きするとき、私たちは今・ここにはない物や場所や出来事と、間接的にであるけれどもつながっている。

ニュースで中継される事件の現場、今聴いている音楽が録音されたホール、写真集のページに印刷されたそそり立つ山脈といった物や場所が、音響・映像メディアを通じて私たちのいる今・このこと、時間的、空

間的な隔たりを超えて接続される。たとえばニュースの現場中継の場合、私たちは画面の中でニュースを伝える現場記者とつながっていると同時に、それを映しているカメラマンの身体とも接続しており――私たちは彼／彼女が見聞きするように、あるいは彼／彼女が見聞きさせたいように見聞きする――、そのことを通じて事件の現場という特定の場所や時間や出来事と接続しているのである。

<sup>(5)</sup> 私たちが現在知っている――正確に言うところ、感じ、了解している――日本や世界、世界内のさまざまな社会的、文化的な領域やジャンルの広がり、そのようなメディアの媒介作用を通じて私たちの前に現われた場の広がりである。私たちは、メディアの媒介作用を通じて私たちの目や耳に届く言葉や像をつづり合わせて「日本」や「世界」、「スポーツ界」や「芸能界」、「流行の世界」や「話題の世界」といった世界の自分なりの像を形作る。もともと、私たちの耳目に入る前に、そうした世界の像は新聞や雑誌、テレビやウェブサイトの編集者によって、すでに切り貼りされ、加工されており、私たちはそうした編集された世界の像を、さらに自分なりに取捨選択し、編集して我がものとし、そこに私たちの身体を接続しているのだ。

たとえば、私たちが感じ、了解する「日本」という広がり、新聞や雑誌、テレビやウェブサイトのニュースなどを通じて、日本人にとって重要であったり、意味があったり、興味深かったりするものとされて選択され、報道される情報やイメージが、「日本」と呼ばれる地理的広がりや、「日本人」と呼ばれる人間の集団の中で、メディアの媒介作用を通じてゆるやかに共有され、その共有を通じて人びとがつながりと場を共有するところに現われてくる。政治学者のベネディクト・アンダーソンは、ネーション――つまり「国」や「国民」――を「想像の共同体」と呼び、その成立に新聞や小説のような国内市場を広範に対象とする刊行物を商品化した出版資本主義の展開が欠かせないとしたと論じている。

（若林幹夫「社会学入門 一步前」（一部改変）による）

〔注〕メモリ・カードやUSBメモリ——共にコンピュータの情報を記憶しておく装置。

ベネディクト・アンダーソン——アイルランド出身の政治学者。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 身体が「場」であるとは、何やら奇妙な物言いに思われるかもしれない。

その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 私たちは活動の土台として身体をとらえ、他者や外的環境世界と出会いながら「私の経験」をよりよく発展させている身体的存在であるということ。

イ 私たちは身体を窓口として自らの思いや思考を表出するため、他者や世界と直接身体が触れ合うことがなければ、相互関係を結ぶことはできないということ。

ウ 私たちは人間に共通する身体的な活動を経験のより所とするため、かわりあった他の身体の経験を想像して「私の経験」とすることができるということ。

エ 私たちは身体を窓口として他者や事物からなる世界を受け止めたり、それらに働きかけたりしながら、世界と自己との関係を結んでいるということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> つながりがないことを互いに示すという、言ってみれば最低限のつながりとあるが、「つながりがないことを互いに示す」ことがどうして「つながり」と言えるのか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 電車やエレベーターの中で、他人と目を合わせないようにして素知らぬ顔をすることは、異なる他者と社会生活を営んでいくための工夫であるが、結局は思いがけないかたちでかわかることもあるから。

イ 電車やエレベーターの中で、他人と目を合わせないようにして素知らぬ顔することは、互いの関係性を否定する行為であるが、その振る舞い自体が他者に自分の意思を伝達していることになるから。

ウ 電車やエレベーターの中で、他人と目を合わせないようにして素知らぬ顔することは、相手を不快にさせないための気づかいであるが、互いにその意思を理解し合えないまま状況を共有しているから。

エ 電車やエレベーターの中で、他人と目を合わせないようにして素知らぬ顔することは、互いの存在を軽視する所作であるが、本当は自分を相手に受容してもらいたいという気持ちの裏返しであるから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 暗黙の規則によっている。とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 意識しているとは限らないが、人間は所属する社会や文化が定義する振る舞いや所作の意味に従って、他者と相互に応答しあっているということ。

イ 意識しているとは限らないが、人間は所属する社会が決定した文化的規則を、場に応じて作り変えながらコミュニケーションしているということ。

ウ 意識しているとは限らないが、人間は所属する社会によって明記されたルールを目にすることで、同じような身振りをすることになるということ。

エ 意識しているとは限らないが、人間は所属する社会の規定を拡張し、文化や社会の枠組みを超えた価値観に基づく行いをするようになるということ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> そのようにして今・ここにいない他者たちとの間のつながりを生きているのである。とあるが、どういうことか。九〇字以上一〇〇字以内で説明せよ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 私たちが現在知っている——正確に言うところ、感じ、了解している——日本や世界、世界内のさまざまな社会的、文化的な領域やジャンルの広がり、そのようなメディアの媒介作用を通じて私たちの前に現われた場の広がりである。とあるが、「私たちが」「感じ、了解している」「世界とは、どのような世界なのか。八〇字以上九〇字以内で説明せよ。」

〔問6〕 本文の内容について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 動物の本能が規定している相互の関係の意味やコミュニケーションの仕方は、人間の理性が規定した意思疎通の方法に劣る。

イ 「話し言葉」の音声は発話者と聞き手との間で分断されることがあるので、相互主観的に意図や意味を伝え合うことが必要である。

ウ 昔からある石碑や粘土板、巻物や書物などは、メモリ・カードやUSBメモリなどの電子媒体よりも書き手と読み手の関係を作り出す。

エ 新聞や小説といった出版物がゆるやかに共有されていくなかで、似たようなものの見方をする共同体が形成されるようになった。

## 5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、内の文章は、本文中に引用されている「同じく仙遊観に題す」の現代語訳である。また、「内」内は、本文中に引用されている漢文の現代語訳である。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

わたしが住んでいる仙<sup>せん</sup>台<sup>だい</sup>という町は、伊達<sup>\*だて</sup>政宗が青葉山に仙台城を築き、ふもとにひろがる平地に城下町を建設したところからはじまっておりま<sup>す</sup>。ただし、それ以前に何もないかというところではなくて、もともと伊達氏よりもさきにこの地域を支配した国分<sup>こくぶん</sup>氏という豪族がこの山に城を築いて千代<sup>せんだい</sup>城と称したという<sup>こと</sup>があり、政宗はその廃城のあとを利用して城を築き、文字を改めて仙台城と名づけたのだそう<sup>す</sup>です。

国分氏の「千代城」という名称の由来についてはいくつかの説がありますが、わたしはこのあたりを今でも川内<sup>かわうち</sup>と呼んでいるその地名を音読<sup>おんよみ</sup>して「せんだい」とし、めでたい文字をあてはめて「千代」と称したと考えるのがもっとも明快で、す<sup>じ</sup>がとおっている<sup>こと</sup>と思います。

仙台城の本丸<sup>\*</sup>があつた山が青葉山と呼ばれ、仙台城の別名を青葉城ということは多くのかたがごぞんじかと思<sup>い</sup>ます。すこし以前の大相撲で、青葉城と青葉山という、宮城県出身の二人のおすもうさんが活躍していたのをご記憶のかたもいらつしやるでしょう。そこで、本丸は青葉山ですが、二の丸と三の丸はそのふもとの川内にあり、そのすべてを取りかこむように広瀬川がぐるっと湾曲して流れ、自然の堀になつております。山すそを川が取りかこんでいるという、要害にふさわしい地形で、国分氏や伊達政宗が目をつけたのも、なるほどとなつとくができます。ついでながらわたしの研究室がある大学の建物は、この川内の仙台城二の丸跡にあたつております。

要するに広瀬川が大きく湾曲して流れる内側ですから、川内という地名はまことに自然ですし、それをすこし気どつて音読みにすれば「せん

だい」となり、城の名となればとかくめでたい文字を選びますから、「千代」の字をあてた——伊達氏以前の豪族の話ですから記録も何もなく証明はできませんが、その点は他の説も同じことなので、<sup>(1)</sup>右のように考えるのが今のところいちばん無理のない推理だと思います。

それはそれとして、つぎにこの「千代」を「仙台」と改めたのは政宗にちがいないのですが、その由来についても、たしかな記録は残されておりません。しかしいつのころからか伝承として、政宗は唐詩の句にヒントを得てこの文字を思いついたといわれております。

鎌倉、室町から江戸時代に及ぶまで、日本でひろく読まれた唐詩の選集に『三体詩』という本がありますが、この本は七言絶句、七言律詩、五言律詩がそれぞれ一巻になっており、この三つの形式にかぎっているので『三体詩』というのです。そしてその第二巻、七言律詩の最初に韓翃の「同じく仙遊観に題す」という詩があり、その第一句が「仙台 初めて見る 五城楼」となっております。「観」というのは道観、つまり当時さかんであった道教の寺院もしくは教会のこと、「仙遊観」という道観の建物が、壮大ですばらしいことをたたえる詩で、まるで仙界の崑崙山にあると伝説にいう五城十二楼のようだと詠じられます。

(2) 仙台 初めて見る 五城楼

風物凄凄として宿雨収まる

山の色は遙かに連なる 秦樹の晩

砧の声は近く報ず 漢宮の秋

疎かなる松 影落ちて 空壇浄く

細やかなる草 春香ぐわしく小洞幽かなり

何ぞ用いん 別に方外（別世界）を尋ね去くを

人間に亦た自ら丹丘（仙山）有り

仙台初見五城楼

風物凄凄宿雨収

山色遙連秦樹晩

砧声近報漢宮秋

疎松影落空壇浄

細草春香小洞幽

何用別尋方外去

人間亦自有丹丘

（韓翃「同じく仙遊観に題す」）

——韓翃「同題仙遊観」

伝え聞く五城楼のような建物を初めて目にした。

あたりは寒々と秋の気配に満ち、夕べからの雨も上がった。

山の色は遙かに、暮れゆく秦の地方の林に連なる。

布地をやわらげ、つやを出すために打つ木槌の音が間近に聞こえ、

漢の宮殿に秋の訪れを伝えていく。

まばらな松の枝が影を落とし、祭壇は塵一つなく静まり返る。

細やかに茂る草は春のように香り、小さなほこらがひっそりとある。

どうして別世界に尋ね求めゆく必要があるだろうか。

人間世界の中にも仙人が住むという山は存在するのだ。

さらにもうひとつ『三体詩』には、崔曙という人の「九日 仙台に登りて、劉明府に呈す」九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

劉明府に呈す「九月九日重陽の節句の日に仙台に登って、

政宗が国分氏の千代城の跡に改めて城を築いたとき、「千代」という

のは「千代に八千代に……」というめでたい文字にはちがいありませんが、何しろ没落してしまった豪族の命名ですから、そのままというわけにはいかなかったでしょう。

もしかすると、城の名を考えていたときにたまたま『三体詩』を読んでこの文字が目についた、などということも考えられなくはない——小説かドラマならばそういう場面を設定してもよいところですが、もうすこし現実に即した推理としては、伊達政宗はすぐれた武将であり、政治家であると同時に、詩歌にも通じ、レベルの高い教養を身につけた人、今風にいえば文化人でもありましたから、当時の教養のありかたからいって、『三体詩』などは読んだことがあるというようなことではなくて、ほとんど全部を暗記するくらいに親しんでいたと思われるます。

(4) ですから、「千代城」という名を何とかしなければならなかったとき、右に挙げた詩から「仙台」という文字を思いついたというのはごく自然だと思えます。もとより政宗自身がこのことについて何も書き残してはいないので断定的なことはいえませんが、右に述べたようなこと以外にはほとんど考えられないように思います。

ある宮城県の郷土史家の書かれたものに、政宗が『唐詩選』から「仙台」という名称を思いついたとありましたが、右に挙げた韓翃の詩は『唐詩選』にはみえておりません。あるいは『三体詩』と『唐詩選』をとりちがえたのかもしれませんが、もうひとつの崔曙の「九日仙台に登りて劉明府に呈す」という詩は『三体詩』と『唐詩選』の両方にみえていて数すくない詩のひとつなので、『唐詩選』にみえるこの詩題から、という可能性も考えられないではありません。(5) しかしわたしは、政宗が『唐詩選』を読んでいた可能性はほとんどないと思います。

このように申しますと、さきほど政宗が高度の教養人であるように述べたのと矛盾するように思われるかもしれませんが、そうではありません。『唐詩選』はむかしから日本人によく読まれてきたと申しますが、

その「むかしから」というのは、じつはだいたい江戸時代のなかばあたりからのことなのです。

この本は中国の明代の後半、十六世紀の終わりに編集刊行されたもので、日本にも明版と呼ばれる明代の刊本が、わりに早く輸入されてはおりますが、数もすくなく、かぎられた人しかみることはできませんでした。

これが日本でひろく流布するのは、有名な江戸の儒学者、荻生徂徠の門人、服部南郭という人の校訂した本が江戸で出版されたことがきっかけになるので、それは享保九年、西暦でいえば一七二四年のこと、政宗は一六三六年に亡くなっておりますから、九十年ほどたっております。

中国の本、いわゆる漢籍が日本でひろまるためには、やはり日本で改めて出版される、今という復刻版もしくはリプリント版が出るのが前提になります。現在は無断で復刻出版をすると犯罪行為になりますが、当時は国際間協定などがあるはずありませんから、需要がありさえすれば、遠慮なくリプリントを出版しました。

日本で出版された漢籍のリプリントを「和刻本」と申しますが、江戸時代出版された和刻本漢籍の種類と量はたいへんなものです。しかしその中でも、同じ本が大量に出版されたという点では、『唐詩選』はすばぬけております。十万部をくだるまいというのが専門家の推計で、おかげで版元の嵩山房という江戸の本屋はおおもうけをしました。しかしそれは享保以後のことですから、政宗のあずかり知らぬことです。

そこで、『三体詩』のほうはと申しますと、もともと南宋時代、十三世紀なかばに編集された本で、日本には鎌倉時代に輸入されており、もっとも早い和刻本は十四世紀、南北朝時代のものでされており、そして室町時代になると、何回も何回もくりかえし出版されており、江戸時代の初期までは、日本の知識人たちは唐詩を読むといえはまずこの本を読んだもので、いわば知識人必読の書でした。

ですから、政宗のような人は、全部を暗記しているくらいだったにちががなく、何かにつけてこの中の詩句を思い浮かべるのは当然のことだと思われるのです。

(村上哲見「漢詩の名句・名吟」(一部改変)による)

〔注〕伊達政宗——戦国時代から江戸時代初期の武将。

本丸——城の中心となる建物。本丸の外側の建物を二の丸とい  
い、二の丸を囲むように築かれた建物を三の丸という。

青葉城と青葉山——共に宮城県仙台市出身の大相撲力士。青葉  
城は一九八六年に、青葉山は一九八二年に引  
退した。

唐詩——漢詩。中国で唐(六一八年—九〇七年)の時代から作  
られてきた詩。

七言絶句、七言律詩、五言律詩——漢詩の形式。

韓翃——中国の唐の時代の詩人。

道教——中国の伝統宗教。

仙界——仙人の住むところ。

崑崙山——中国古代に西方にあると想像された高山。

崔曙——中国の唐の時代の詩人。

漢——昔の中国の王朝。紀元前二〇二年—紀元八年までを前漢  
と呼ぶ。

陳子昂——中国の唐の時代の詩人。

『唐詩選』——中国の唐の時代の詩人の詩選集。

明——昔の中国の王朝(一三六八年—一六四四年)。

校訂——古書などの本文を、他の伝本と比べ合わせ、手を入れ  
て正すこと。

享保——江戸時代中期の年号。

復刻版——昔の出版物を、装丁や紙面などをもとの形に再現し  
て出版したもの。

南宋——昔の中国の王朝(一一二七年—一二七九年)。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 右のように考えるのが今のところいちばん無理のない推理だと思  
います。とあるが、どういうことか。その説明として最も適切  
なものは、次のうちではどれか。

ア 「千代」という城の名は、自然豊かな「川内」を切り開いて城下町を  
つくる際に土地の歴史を重んじ、読み方をそのまま残したと考えるの  
が合理的であるということ。

イ 「千代」という城の名は、ふもとを流れる広瀬川にちなんだ「川内」  
を音読みし、伊達家が繁栄することを願ってめでたい漢字をあてたと  
考えるのが自然だということ。

ウ 「千代」という城の名は、昔からこの地にあった「川内」という地名  
を音読みして、そこに縁起が良いとされる漢字をあてて付けられたと  
考えるのが妥当だということ。

エ 「千代」という城の名は、かつて存在していた「川内」の城と区別す  
るために読み方はそのままに、異なる漢字に変えたとするのが一般的  
だと考えられているということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 仙台 初めて見る 五城楼 とあるが、この一句が指し示してい  
るものは、次のア～オのうちではどれか。

ア 千代城

イ 仙遊観

ウ 崑崙山

エ 人間世界

オ 劉明府

〔問3〕「仙台」は比喩的に用いたのです。とあるが、どういうことか。

その説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 韓翃は高台ゆかりの仙人について述べる際、その例として崔曙が好んだ「仙台」という言葉をあえて第一句に用いて、華やかな印象を与えたということ。

イ 「仙台」は前漢の文帝の時代から歴史上の権力者たちに好まれ、繰り返し使用されてきた語であるので、新たに築いた建造物を祝うのにふさわしいということ。

ウ 韓翃は漢詩を作るにあたり、崔曙が詩に用いていた「仙台」という語を使用することによって、目の前にしている建造物の素晴らしさを表現したということ。

エ 「仙台」という語は数々の名だたる詩人が用いてきた語であるので、仙人の存在を暗示して築城という大事業の成功を祈念するのに都合が良かったということ。

〔問4〕<sup>(4)</sup>ですから、「千代城」という名を何とかしなければとなったとき、

右に挙げた詩から「仙台」という文字を思いついたというのはごく自然だと思います。とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 記録が残っていないので証明はできないものの、一国の主の城に名を付けるからには、没落した豪族よりも格調の高い名前がふさわしいと思ったであろう伊達政宗が、当時まだ誰も読んでいない『三体詩』から借用し、重みを出そうとしたのは当然であると考えたから。

イ 要害として都合のよい場所ではあるものの、没落した豪族の城の名をそのまま使用できないと思ったであろう伊達政宗は、新たな城の名を考える際に、自身が精通していた『三体詩』の中にある「仙台」という語が思い浮かんだとしても不思議ではないと考えたから。

ウ 新たな城の主の印象を親しみやすいものへ変えようとしたであろう伊達政宗にとって、没落した豪族が命名した難解な城の名前は好ましくなかったと思われ、詩歌に用いられる口ずさみやすい「仙台」へ改名したとする推論はとても現実的なものであると考えたから。

エ すぐれた政治家であった伊達政宗は、すでに没落したとはいえ人々に親しまれた豪族の子孫に配慮を欠くことができなかったと思われ、要害の地に建つ新たな城の名前を考える際、あえて過去に存在した豪族の名に似ている語を用いたとしても筋が通ると考えたから。

〔問5〕<sup>(5)</sup> しかしたしは、政宗が『唐詩選』を読んでいた可能性はほとんど

ないと思います。とあるが、筆者がこのように考えるのはなぜか。その理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 伊達政宗に深い感銘を与えたとされている崔曙と韓翃の詩は、『三体詩』には多数掲載されているものの、『唐詩選』には掲載されていないから。

イ 日本で『唐詩選』を広く流布させたのは伊達政宗に師事した荻生徂徠や服部南郭であり、伊達政宗自身が流布させたのは『三体詩』であるから。

ウ 漢籍の『唐詩選』を和刻本として出版した版元の嵩山房が店を構えていた江戸と、伊達政宗の城のあった場所とは大きく距離が離れているから。

エ 明代の後半に編集刊行された『唐詩選』が日本で広く読まれるようになった時代と、伊達政宗が活躍した時代には時間的な隔たりがあるから。

〔問6〕<sup>(6)</sup> あずかり知らぬとあるが、この「あずかる」と同じ意味で使わ

れているものは、次のうちではどれか。

ア 生徒会規約の起草にあずかる。

イ 先生からお褒めにあずかる。

ウ 友人の荷物をあずかる。

エ 延長戦の決着をあずかる。

〔問7〕 本文の内容および構成を説明したものとして最も適切なものは、

次のうちではどれか。

ア 導入部で筆者の身の回りの話や多くの人にとってなじみのある大相撲の話題を取り上げること、読者が気負わずに筆者の論を読み進められるようにしている。

イ 実際に『三体詩』から有名な漢詩を引用することによって、唐詩の音の響きの美しさを読者に理解させ、筆者の考える唐代の詩の魅力を余すところなく伝えている。

ウ 「もしかすると」から始まる逆説を挿入し、筆者や郷土史家の想像を展開すること、地名の成り立ちを考えるとという仕事の楽しさや自由さを声高に述べている。

エ 中国と日本における印刷と出版の歴史を時系列に並べることによって、当時の日本が抱えていた、長期にわたる国際間協定の不備という問題に光を当てている。

7  
L

国

五  
日